

本資料の構成要素

この資料において配列・構成した要素は、以下のとおりである。

1	2・3・4・5	6	7	8
月	教材名・時数・指導目標・言語活動	時	学習活動	評価規準
4月	<p>朝の 릴레이 2時間</p> <p>◎ 音声の働きや仕組みについて、理解を深めることができる。(知・技(1)ア)</p> <p>◎ 言葉がもつ価値に気づくとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。(学(丙)に向かう力、人間性等)</p>	1-2	<p>1 詩を通読する。</p> <p>・詩に登場する国や街がどんなところか、また、そこで、どんな人が何をしているのか、情景を想像しながら音読する。</p> <p>2 詩を読んで想像したことや、好きな言葉や表現を交流する。</p> <p>・詩を読んで想像した情景や、好きな言葉や表現などをグループで交流し、どのように音読すれば、詩のよさが伝わるかを相談する。</p> <p>3 詩の特徴を生かして音読する。</p> <p>・詩のよさが伝わるように工夫して音読する。</p> <p>◇グループで分担し、 릴레이形式で読ませてもよい。</p>	<p>【知・技】 音声の働きや仕組みについて、理解を深めている。(1)ア)</p> <p>→ 声の強弱、間の取り方、言葉の調子、声の高さを工夫しながら音読している。</p> <p>【徳】 音声の働きや仕組みについて進んで理解を深め、小学校での学習を生かして音読しようとしている。</p>

- 1 月————— 学習する時期を月割りにして示している。
- 2 教材名————— 各教材の題名を示している。
- 3 時数————— 教材ごとの学習に必要と考えられる所要時数を算用数字で示している。領域が複数にわたる教材については、総時数「3」のうち(読②書①)のように示している。
- 4 指導目標 (◎・) 学習指導要領の指導事項を基に、次の三つの観点について指導目標を設定している。
 1. (知・技) …「知識及び技能」の目標
 2. (思・判・表) …「思考力、判断力、表現力等」の目標
→ 1、2については、指導事項の文末を「～できる。」として示している。
 3. (学びに向かう力、人間性等) …「学びに向かう力、人間性等」の目標
→ 3については、当該学年の学年の目標(3)「言葉がもつ価値……思いや考えを伝え合おうとする。」を示している。

◎…その教材が主たる学習場面であり、確実に身につけることが望まれる。

・…学習経験として蓄積させる。

() 内は、学習指導要領との対応を示している。なお、「指導事項配列表」とも対応しているので、あわせて活用されたい。
- 5 言語活動 (★) — 指導目標を実現するために適した言語活動例を示している。() 内は、学習指導要領との対応を示している。
- 6 時 (活動時程) — 学習活動のまとまりに対応し、その活動が配当時間の何時間目に当たっているかを示している。なお、ここでの時数は、1時間(50分)ごとに区切っているが、学習の内容・性質によっては、例えば30分の区切り、3時間通した扱いなどもありうる。学校・学級の実態に応じて展開されたい。
- 7 学習活動————— 教材ごとに、生徒が実際に活動する場面を想定し、学習活動の流れを具体的に示している。

算用数字 : 学習活動のまとまり。

・ : 算用数字の学習活動をより具体的に示したもの。

◇ : 指導の際の配慮事項や手だて。

(課題①) : 教材末の「学びへの扉」の課題との関連。示した番号は各課題の番号に対応している。

→P000 : 他の教材や、「学びのカギ」(カギ)、「言の葉ポケット」(言の葉)、巻末資料(資)との関連。

→二次元コード : 教科書記載の二次元コードとの関連。

8 評価規準——— 次の三つの観点について設定している。

1. 【知・技】…「知識・技能」の評価。社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っているかどうかを評価する。各教材で育成を目指す資質・能力に該当する「知識及び技能」の指導事項の文末を「～している。」として作成している。
「おおむね満足できる」と考えられる状況を→で示した。
2. 【思・判・表】…「思考・判断・表現」の評価。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域において、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりしているかどうかを評価する。各教材で育成を目指す資質・能力に該当する「思考力、判断力、表現力等」の指導事項の冒頭に、指導する領域を「（領域名）において、」と明記し、文末を「～している。」として作成している。
「おおむね満足できる」と考えられる状況を→で示した。
3. 【態】…「主体的に学習に取り組む態度」の評価。言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを深めたりしながら、言葉がもつ価値を認識しようとしているとともに、言語感覚を豊かにし、言葉を適切に使うようとしているかどうかについて評価する。文末は「～しようとしている。」として作成している。この観点に基づく評価では、
 - (1) 知識および技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりすることに向けた粘り強い取り組みを行おうとする側面
 - (2) (1) の粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の双方を適切に評価できる評価規準を作成することが求められている。評価規準の設定にあたっては、下記③、④に示したように、特に、粘り強さを発揮してほしい内容と、自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動を考えて授業を構想し、評価規準を設定することが大切である。このことを踏まえれば、下記①から④の内容を全て含め、教材の目標や学習内容等に応じて、その組み合わせを工夫することが考えられる。なお、〈 〉内の言葉は、当該内容の学習状況を例示したものであり、これ以外も想定される。
 - ① 粘り強さ〈積極的に、進んで、粘り強く等〉
 - ② 自らの学習の調整〈学習の見通しをもって、学習課題に沿って、今までの学習を生かして等〉
 - ③ 他の2観点において重点とする内容（特に、粘り強さを発揮してほしい内容）
 - ④ 当該教材の具体的な言語活動（自らの学習の調整が必要となる具体的な言語活動）

※「国語科の学習評価」も参考にされたい。